



コロンビア独立200周年

— 向上しようと変化し続ける国 —

駐日コロンビア大使

パトリシア・カルデナス



1810年7月20日(金)市場の日、午前11時、サンタフェ・デ・ボゴタのマジヨール広場には、商人、呼び売りの商人、先住民、クリオージョ(中南米生まれのスペイン人)、全ての社会階級の者一杯であった。

正午近く、ルイス・デ・ルビオ(クリオージョ)がスペイン人商人ホセ・ゴンサレス・ジョランテの食品店に入った。クリオージョのアントニオ・ビジャセンシオ氏を祝う食卓に飾るための花瓶を貸してほしいと頼むためであった。

だが、スペイン人商人は、その頼みを断った。それが、社会的不平等に対するスローガンを呼び始めていたクリオージョの怒りを呼び覚ますこととなった。最初の騒動は待たなし、スペイン政府の管理下にあった村では、人々の不満が溜まっていたこともあり、この「些細な」衝突が先住民、白人、貴族、平民、金持ち、貧しい者の宣戦布告に繋がり、抗議するに至った。

この200年前のまれに見る出来事がコロンビア共和国の始まりでした。それ以来、我が国は全ての面で大きな変化を遂げてきました。

経済面では、農業と植民地時代のスペイン依存「受け身の商業」であったものが、1885年に採択された強い保護貿易政策に変わり、それが安定性をもたらし、現代化への扉を開きました。2009年、世界不況下で周辺地域はマインス1.8%であったにもかかわらず、0.3成長長しています。

19世紀の保護主義政策のおかげで、現在の安定した経済を築くことができましたが、一層成長するにはグローバル経済に加わることも重要であると考え、新自由主義政策を取り入れ、市

場をオープンにしました。1991年そのプロセスが確立し、2002年〜2008年の間で輸出は3倍のほぼ380億ドルに上昇しました。コーヒー産業に関しては、コロンビアの200万軒以上の家計を支えています。

多くの市場へ進出し、世界で最もマイルドなコーヒーと評価されています。また他の産業では、切花は世界の輸出第二位、カーネーションの生産において、第一位です。我が国は、中南米大陸における貿易の重要地点になりつつあり、他の地域、特にアジアとの絆を強化していきたいと思っています。

このように200年前の独立が、支配ではなく相互協力関係という国際化を受け入れる立場からコロンビアと世界との絆を結びつけることになりました。それゆえに、コロンビアも外国直接投資の機会を開き、2002年から400%に増加しました。実際、2008年の間に合計1060万ドルが我が国に投資され、最大の数字が国史で記録されています。

しかし、経済数字だけでは、国の富は測られません。コロンビアは、生物多様性の国であります。これはスペイン征服時代から有名な、ホセ・セレスティノ・ムティス氏はムエバ・グラナダ(当時のコロンビアの名称)に到着し、熱帯植物に驚いたそうです。1783年に承認された植物調査隊のお陰で、我が国の生物多様性が調査され、分類され始めました。2010年は国際生物多様性年、コロンビアは国としても一層環境を守っていかな

ければならないと思っています。我が国には多くの宝があり、地球上の生物多様性の10%が生息しています。植物55,000種、蘭3,500種、鳥類1,721種、蝶3,000種、国土で一番占めているものは両生類です。

これらの特質が多くの観光客を呼び寄せています。アルバロ・ウリーベ大統領の民主的な安全政策のお陰で、安全状況が改善され、コロンビアを訪れる観光客は2002年66万1千人であったのが、2008年には145万人と2倍以上に増加しました。

我々の歴史は、文化と音楽の面でも際立っています。植民地時代に民族が交じり合い、先住民、黒人、白人の文化をイメージさせる多様な伝統が、文化や音楽に影響を与え、その遺産は現在も伝えられています。コロンビア音楽は、社会的影響を残し続け、現在、強さと楽しさと共に国境を越えています。

今年、独立200周年記念の年、コロンビアの歴史の重要なエピソードを祝って、様々なジャンルや特徴あるコンサートが、世界各国の都市で開催されます。また、展示やフェア、セミナー、様々なイベントも行われる予定です。

植民地から共和国へ変わった歩みと、記される独立後の200年と同様に、現在も変化することを止めず、進化し続け、相互に新しく収穫をもたらす絆を強化したいと思っています。

日本は、コロンビアにとって、そのように絆を深めたいと願う国のひとつであり、「グラン・フイエスタ・ナショナル」の祝賀にぜひご招待したいと思っています。

ウズベキスタン

食から知る民族文化②

3月22日
豊島区みらい館大明(たいめい) 調理室にて

ウズベキスタン大使館と豊島区のNPOいけぶくろ大明(たいめい)の協力いただき、総勢55人が参加をする賑やかなイベントとなりました。

ウズベキスタン側は、大使館の二等書記官のガイポフ・オタバクさんご夫妻、三等書記官エルムロドフ・エルドルさん、さらに3人のウズベキスタンの留学生たちという多彩な顔ぶれが揃いました。

プログラムは初回同様、2部構成で第一部は映像やパンフレットを使ったウズベキスタンの紹介、前日の3月21日はウズベキスタンの新年でナウルズという祝賀の様子も映し出され、皆とても興味深く聞きっていました。第二部の調理実習では、ガイポフ夫人のイロダさんの手際の良さ調理の腕に感嘆の声が上がりました。当日の様子をレシピも交え、ウズベキスタン大使館のガイポフ・オタバク書記官とIAC会員の

中嶋智華子さんの感想から紹介します。

「お手伝いどうもありがとうございました。」イロダ夫人のお言葉。

国際化時代ですが、大使館員ご家族が一般の日本人と同じ目線で交流する事は少ないと思います。留学生も参加し自然な国際交流ができてよかったです。家庭料理はどの国でも各地方、各家庭で味が違うものですが、今回はガイポフ家の味でした。ウズベキスタンは、東西文明が交差した地域で、ここでは、食文化も交流したにちがいないと、当日のメニューや材料から思いを馳せました。

かぼちゃを包んで蒸した饅頭は、中国の小籠包と似ていて、それに驚くほどマッチしたヨーグルトソースは、ウズベキスタン周辺の中央アジアだけでなくヨーロッパの人たちも昔から食していたものでしょう。

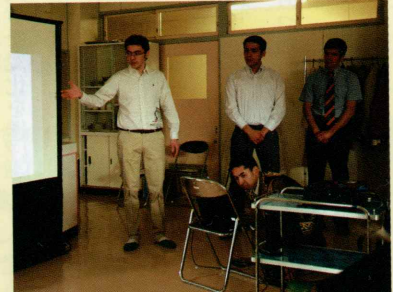
赤かぶのビーツからはロシア料理を連想し、「ナン」とウズ

中央アジアのウズベキスタンとの協力事業を2つ紹介します。一つは、「食から知る民族文化」②でウズベキスタンを取り上げた文化交流イベント、2つめは、日本のアマチュア発掘隊がウズベキスタン南部の遺跡発掘を支援していることです。

ウズベキスタン大使館からの感想

二等書記官 ガイポフ オタバク

とても流暢な日本語で日本での異文化体験やウズベキスタンの話をした留学生たち
アブダハミドさん、フィジルさん、ソヒブさん



サプライズ(イロダさんが時間をかけて家で準備して下さった品々)

ソムサ(ウズベキスタン風ミートパイ)



ナン



チャキチャキ(まわりは蜂蜜の甘いお菓子)

マンティ (ウズベキスタン風饅頭)

●材料(約20個分)

- 小麦粉(薄力粉) 500g
- 水、塩、こしょう
- かぼちゃ 500g 玉ねぎ2個
- プレーンヨーグルト適宜



●作り方

- 1) 生地は少しずつ水を加えながらギョーザの皮を作る要領でこねる。耳たぶくらいの硬さにし、濡れフキンをかぶせてしばらく寝かせる。
- 2) 生地を麺棒で広げていき、それを8~9cm四方くらいに切る。
- 3) 生地の上に、チーズおろして削ったかぼちゃときざんだ玉ねぎを載せて包んでいく。
- 4) 蒸し器で20分程度蒸し、ヨーグルトソースをかけて食べる



ビーツ(赤かぶ)のサラダ

●材料/ビーツ(赤かぶ)、ジャガイモ、鶏肉、卵、きゅうりのピクルス、ブラックオリーブ オイルのピクルス、マヨネーズ



●作り方

- 1) 茹でたビーツ、ジャガイモ、鶏肉、キュウリのピクルスはチーズおろしの目の粗いところで削る。(包丁で小口に切っても良い)
- 2) ゆで卵は白身と黄身を分け、白身は上記のものを同じように削る。
1と2を合わせ、マヨネーズを合せて混ぜ、お皿に盛り、茹で卵の黄身、ブラックオリーブオイルを小口に切ったものを上に飾り乗せる。



写真: 藤原明治 (IAC会員)

まず初めに、このような素晴らしいイベントを開催して下さったIACに深く感謝申し上げます。
ウズベキスタンの歴史、文化、観光に関するこのようなイベントのおかげで、参加された多くの方がウズベキスタンをより身近に感じることが出来たことと思います。ナウルズの祝日にウズベキ料理の紹介が行われるというのは、多くの共通項を持つウズベキ人と日本人にとって、象徴的な意味を持っています。
その国を理解するのに、「食」は身近で、誰もが受け入れやすいテーマだと思います。作り方が容易で時間がかからない何品かはその場で調理の実演をしましたが、サモサは出来上がったものが持ち込まれていたので、日本人参加者以外の作り方に興味津々で、会場は質問にあふれていました。食文化以外にも、ウズベキスタンの歴史や観光名所などについても紹介しましたが、皆さん、大変関心を持って、一生懸命に聞き入って下さっていました。
シルクロードの中心として栄え、東西文明の交差点として各時代の先進文化・美術を取り入れた我が国の美術文化は、日本の皆様には斬新で独創性のあるものとして捉えられました。
日本とウズベキスタンの友好関係は千年にもわたって続いており、特に日本の古都・奈良とウズベキスタンの古都・ヒヴァの間にはシルクロードに始まる交流の歴史があります。
先日、都内と奈良で開催された、「ウズベキスタンの古代文明および宗教ー日本文化の源流を訪ねて」という国際シンポジウムが、新たな多くのウズベキスタンへのファンを集め、心をひきつけました。今後も積極的に、我が国と日本の間で共同開催を実施し、日本の皆様に、ウズベキスタンの魅力を伝えていきたいと思っています。
イベントでは、大使館職員や日本で学ぶウズベキ人留学生たちが、ウズベキ料理の豊かさや彩りを日本の皆様に紹介すべく頑張りました。こうしたイベントは、私たちの友好関係と相互理解を深めることに多大な貢献をしてくれていると言えます。
皆様には、是非ウズベキスタンのお越しいただき、私たちの祖国の美しさやユニークさをその目で確認していただきたいと思っています。



真ん中の4人がガイポフさんご夫妻と娘のノデライちゃん、ローラちゃん。左は、ウズベキスタン大使館書記官エルムロドフ・エルドル書記官、右はガイポフさんの友人の横田純平さん

新聞 3月23日
WEB 3月23日

当欄では国内外で元気に文化交流を実現させている人たちを紹介しています。

ウズベキスタン・日本共同調査で「ウズベキスタン南部のカラバグ遺跡への日本の発掘支援隊（アマチュア）を派遣」について川崎知（IAC理事/ソフィア株式会社（旅行業）代表）が、紹介します。

雲をつかむような地の下からの誘惑



発掘現場で現地の関係者と一緒に加藤九祥先生（後列右から3人目）現地責任者のトルグノフ博士（後列右端）

その年には残念ながら組織できず、翌年2009年4月に4人の第一次支援隊が出発した。シルクロードを32回にわたって踏破し続けた高野直明氏を団長に、元公務員の男性、JICAで活躍したエンジニア、紅一点としてウズベキスタンで日本語講師の経験もある女性とその輝かしいメンバーである。古曳氏が九祥先生の発掘の手伝いで現地に二足先に出発したので、添乗員の役目を引き受けて頂いた。現地での行動の詳細は紙面の関係で割愛するが、民間の文化交流として以下の実績をお伝えする。

①はるばる日本から民間人がカラバグ発掘支援保護のため、駆けつけた上に、参加者それぞれからの支援金の提供を現地では驚き、大きな感謝で受入れた。②中央テレビ局からも取材が入り、日本の民間支援隊の活動が知れ渡った。③その結果、現地責任者トルグノフ博士の今後の発掘活動に多大な貢献ができた。最後に現地の人々から歓迎のウオッカ攻めにあい、全員がぐたくたになったことを踏まえ、今後の隊員の資格に、酒に強いことを報告します。

【第二次カラバグ遺跡発掘支援隊員を募集中です。発掘に関する経験は問いません！ お問合わせお待ちしております。】

（文と写真・川崎知（IAC理事/ソフィア株式会社（旅行業）代表）

2008年の初夏のことである。突然、ウズベキスタンからの電話が鳴った。聞けば、加藤九祥（きゆうぞう）先生からの言づけを伝えたい、とのこと。加藤先生は88歳になった今でも、南ウズベキスタンの仏教遺跡「カラテパ」で年間3ヶ月は発掘に従事している高名な考古学者でシルクロードに興味があるものはだれでも知っているピックネームである。そのザックバランな人柄から、だれからも慕われ、私のような素人でも分け隔てされず、時には大好きなお酒を片手にその豊富な人生経験を語ってください、人生の師ともいべき方なのだ。

「アマチュア（素人）のカラバグ遺跡発掘支援隊」遺跡の宅地化を防ぐ組織せよ」とのこと。「カラバグ遺跡」「一体？」「さっぱり？」雲をつかむような話である。しかし九祥先生の申しつけとあれば、無視はできない。先生と交流のある団体や先生の友人である古曳（こびき）正夫氏（元弁護士でシルクロード研究家）に問い合わせ、何とか概要がつかめてきた。それは何とカラバグ遺跡一帯は大月氏国の王都だった、という説が有力なクシヤン朝時代（BC1世紀）の遺跡、前漢の武帝が匈奴を討つためあの張騫を派遣した国「大月氏」を知ったとたん、雲をつかむような話だと思ながらも、私の心は、地の下からの誘惑にとらわれてしまったのだ。



地元テレビ局の取材を受ける隊員の亀田邦宏さん



ベキスタンでも呼ばれるイロタさんお手製の丸いパンもいいただきました。それらを味わいながら、食にしている人々の興味が何世代にもわたり民族や国境を越えて受け継がれてきたのだらうと感じました。

（中嶋智華子 IAC会員）

パロフ（ピラフ）

●材料（5～6人分）
米1kg、
牛肉赤身ブロック500g、
サラダ油200g、
人参3～4本（米と同量の重さ）、
玉ねぎ4～5個、ひよこ豆150g、
塩とこしょう適宜

●作り方
1) サラダ油を厚手の鍋に入れ熱くなったら肉を入れる。そのあと、玉ねぎを入れて色づくまで炒め、人参を加えて炒める。2) 水を野菜がかぶるくらい入れて煮込む。柔らかく下ごしらえをしておいたひよこ豆と、米（洗った後小さじ1杯のぬるま湯に15～20分付けておいたもの）をいれて、芯がなくなり水気がなくなるまでさらに煮込む。3) 盛りつけはブロックの肉を切って上にかざりつける

トマトサラダ

●材料（3～4人）
トマト（よく熟れて新鮮なもの、かたいトマトは適さない）1個、
キュウリ1本、玉ねぎ半分
塩とこしょう適宜

●作り方
1) トマトはざく切り、キュウリと玉ねぎは薄切り。玉ねぎは切ったあとしばらく水にさらす
2) 材料をそれぞれボウルにいれてしばらく置く。食べる直前に混ぜ合わせる。

一緒に実現するIACの文化交流

*IACの活動に参加・ご支援いただける会員を募集しています。
年会費：個人 1万円、法人5万円（一口）
*「風流」の同行取材にご協力いただける方を募集しています。
詳しくは事務局にお問い合わせください。

NPO 法人国際芸術家センター（IAC）
TEL: 03-5426-2047
Email: iactokyo@d1.dion.ne.jp

広告

Expert linguistic services covering 90 languages

Interpreting Services
Document Translation
Video Translation
Secretarial Services

KIKKO Corporation
905 TBR Building 2-10-2
Nagata-cho Chiyoda-ku Tokyo
TEL. 03-3593-0507

植物生まれのココロとカラダに優しいキャンドル

キャンドル専門店 ZAKKA BAKKA

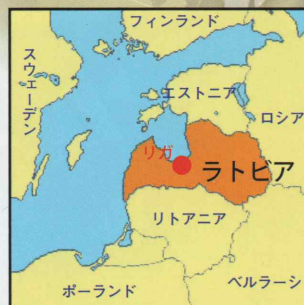
www.zakbakbakka.com

朝日
【ニューヨーク・地方】
ウズベキスタンの首都タシュケントに、日本の民間支援隊が活動している。その活動の様子が、朝日新聞のウェブサイトに掲載されている。この活動は、日本の民間支援隊が、ウズベキスタンの文化遺産を保護し、観光客を呼び込むための取り組みの一環として行われている。この活動は、日本の民間支援隊が、ウズベキスタンの文化遺産を保護し、観光客を呼び込むための取り組みの一環として行われている。

第4回

ラトビア共和国

LATVIJAS REPUBLIKAS VĒSTNICĪBA
ラトビア共和国大使館
EMBASSY OF THE REPUBLIC OF LATVIA



三等書記官
Olegs Orlovs (オレグス・オルロフス) 氏



通訳を務めた堪能な日本語からは、ラトビアと日本への深い思いが伝わってきました。

IACの文化交流の強力なパートナーは、各国在日大使館です。それぞれの国について「民族芸術シリーズ」とは別の切り口でこの紙面からご紹介いたします。4回目はラトビア大使にお話をうかがいました。

このコーナーは引き続きIAC会員の取材で構成いたします。ご興味がある方は、事務局に奮ってご応募ください。同席ご希望の場合もできる限り調整しますので、お気軽にご連絡ください。

●「百万本のバラ」の「原産国」はラトビア

～大使は日本文学を読み、東京マラソンを完走する「文武両道」の人～



ラトビア共和国 特命全権大使
Peteris Vaivars (ペーテリス・ヴァイヴァルス) 氏



大使の出身のルーイエナ町(ラトビアの北部に位置している)の民族衣装ネックレスは特産品の琥珀で作られている。



大豆を原料に使用し、ラトビアの草花を練りこんだキャンドル



裏と表どちらを上にしても使えるユニークなデザインの器花器や食器にと、使い方は自由な発想で。

バルト三国連想ゲーム —— 、エストニアと言えばカスパー・ブラム (バルト)、リトアニアと言えば「日本のシンドラ」こと杉原千畝、そしてラトビアといえば歌「百万本のバラ」。そう、日本では加藤登紀子さんが歌って大ヒットしたこの歌は、ラトビアが「原産国」なのだ。

今年2月、新宿文化センターでひらかれたNTT東日本吹奏楽団と加藤さんとのハイチ救援チャリティー音楽会(主催BHNテレコム支援協議会)で、加藤さんは「この歌はもともとはラトビアの歌なのです」と解説した。

日本語版歌詞によれば、女優に恋した貧乏な絵描きが自分の気持ちを何とか女優に伝えようと、町中のバラを買い集めて広場を埋め尽くす。そのために住む家さえ売った。が、その気持ちを知ってか知らずか、女優はよその町に行ってしまった— というストーリーになっている。しかし、この歌のラトビア語版の原曲(1981)はライモンズ・パウルス作曲、レオンス・ブリエディス作詞の「マーラの歌」で、日本語版とは全く趣旨の異なる歌なのだ。「マーラ」とはラトビア神話に出てくる最高位の女神だが、このマーラがラトビア人の女の子に命を授けたものの、幸せと一緒に与えることを忘れてしまった— という趣旨の歌詞になっているそうである。忘れられた「幸せ」と、国の分割やロシア、ソ連の支配など厳しい運命のもとに長い間置かれていたラトビアの歴史とも重ね合わさってラトビア人に共感を与えたい。ペーテリス・ヴァイヴァルス大使は「ソ連による占領などラトビアは永く苦しい時代がありました。でも加藤さんの歌のお陰で、ラトビアをより身近に感じてもらえるのはうれしいことです。」

外務事務次官を経て初代駐日本大使に就任(2006年)した大使は翻訳ながら夏目漱石『心』、谷崎潤一郎『鍵』、村上春樹『ノルウェイの森』などを読破した大変な文化人である。

また、通訳して下さったオレグス・オルロフス書記官の日本語も素晴らしい。

応接の壁に天皇の御製を毛筆で記した色紙が掛けてある。

「シベリアの凍てつく土地にとらはれし

我が軍人もかく過ごしけむ」

2007年ラトビアの首都リガを訪問、ラトビア占領博物館を見学した際の短歌である。ソ連の占領初期(1940-1958年)、約6万人のラトビア人がシベリアの強制収用所に送られ、その多くがかの地で死亡した。相前後して、シベリア送りとなった旧日本軍人と重ね合わせて詠んだものであるという。

さらに、大使は2月末の東京マラソンに参加、4度目の完走を成し遂げた。あくまでも「文武両道の人」とお見受けした。

(文：山下靖典 (IAC 準会員) 写真：藤倉明治 (IAC 会員))

春夏のラトビアは魅力いっぱい!

・リガマラソン 5月23日 <http://www.nordearigamarathon.lv/en/>
フルマラソンの他にハーフ、5キロ、マラソンリレー(4名)と多彩です。
＜参加ツアーをラトビア大使館の協力でIACが企画。ご参加をお待ちしています。＞

・Go Blonde(金髪で行こう!) 5月28日と29日
多数の金髪女性が一堂に会し、不景気を吹き飛ばすパレードを行うユニークなイベント <http://www.goblonde.lv>

・民芸品市 6月5日と6日
リガの野外博物館で開催 <http://www.brivdabasmuze.js.lv/index.php>
(ラトビア語のみ)

事務局だより

■「食から知る民族文化」③はパキスタンです。申し込みをお待ちしています。(定員30名)
日 時：5月8日(土) 2:30～6:00 田町リーブラにて
講 師：パキスタン大使館 公使イムティアズ・アハマドさん
参加費：2000円(IAC会員1000円)
第1部のお国紹介のあとは、第2部でチキン・カラヒ(トマトとチキンのカレー)やライタ(ヨーグルトを使ったサラダ)などを調理します。

■「国際芸術家センター」、半世紀前の設立当時は各国の芸術家との交流が主事業でこう名付けられました。50年前に「国際～」と民間団体が名乗るのは、新しい感覚だったとか。今年は、設立から半世紀、舞台、芸術関係だけでなく、さらに色々な事業を展開いたします。特に「日本のなかの外国」である各国在日大使館と一般の日本人の方々ももっと交流が図れるような事業の強化を目指します。

■「各国大使館のイベントなど」にご同行いただけるIAC会員のリスト作成を考えています。各大使館主催のイベントに招待を受けても、理事が一人しか都合がつかない場合にご同行希望の会員の方にご連絡いたします。ご興味がある方は、事務局にお問い合わせください。

(理事・事務局長 金屋輝美)

